

近世儒学者譚十三講

第一講：藤原惺窩（ふじわらせいか）

名は肅。冷泉家の出身。相国寺の僧侶だったが、後に朱子学を奉ず。江戸幕府の官学の祖。林羅山、松永尺五等彼のいわゆる「藤門」配下に有能な人材を輩出した。謹厳実直にして、傍にいる者は肅然と居住まいを正し、その悪癖を改めたという。酒を好み、痛飲はすれども乱れず。けじめに厳格で、飲まないと決めたら、時には十日間一滴も口にしないこともあったという。

釋某という傲慢な俊才兄弟がおって、共に才あり学あることを自負していた。かつて惺窩をなじって言った。「貴公は、初め仏教を奉じていたのに、今は儒教を信奉している。これは真を捨て俗に帰依したということじゃないか、義に昧（くら）いんじゃないのか」と。

惺窩曰く、「真がどうの俗がどうのというのは、仏者の言うことで、自分たちの都合がよいように称しているだけのこと。それが仏教なら、天理に反し人間の道を踏み破ることになる。どうしてそれが「真」といえようか」。二人は了見の狭さを恥じ、黙ってしまったという。

他日、ある所で又、この兄弟と出会った。その部屋の壁に草書で書かれた軸が掛けてあった。釋兄弟はそれが読めなかった。他の一同の者たちも皆な読めず、「草書というものは読み難い。楷書にかざる」と言い合った。惺窩は一覧すると、朗々と読み上げ、そして言った。「古人の言葉に、楷書をよく読むものは、必ず草書をもよく読む、とあります」と。
小生意気な銜学者には容赦しない凜然たる態度も辞さなかったようである。

惺窩は傍ら和歌を読み、時に吟詠しては思いを歌に託した。愛弟子の林羅山が訪れた際、羅山の将来を囑望し、歌に賦してこれを贈った。

なれよ富士、雲の上までいや高き、名の誠をも然れとぞ思う

富士山の雲上に聳えるがごとく高名になり、その名に相応しい資質を養成せよ、と。羅山はその期待にこたえて立派な学者になった。（「近哲叢談」より）

第二講：林羅山（はやしらざん）

僧号を道春。「藤門四家」の筆頭。徳川家康以後四代に渡り侍講を勤める。多くの漢籍に訓点を加え、「道春点」として知られる。十八歳にして朱子の「集註」を読んで心服し、仲間を集め講義した。晩年も視聴衰えず、中国の正史である「二十一史」は数回ずつ読んだが、晉書以下十八家の史書はまだとて、七十四歳になってから読んだという「天下の書に於いて読まざる書無き」（「先哲叢談」）浩瀚なる読書家。

ある年の暮れ、菅原玄同という門人が、羅山に「私はまだ朱子の「通鑑綱目」を読んでいません。先生来春になったらどうか私に講義して戴けませんか」というと、羅山曰く「貴方が心から本当にそう思うなら、何で来年をまつ必要があるのか。大晦日から始めましょう」と。（厳し〜い）

明暦三年正月十九日に江戸北部で大火が起こった。羅山の屋敷にも火が迫って、弟子が先生火が廻って来てこちらにも避けられませんかと言うと、ただ頷いただけで一向に読書を止めなかった。再度弟子の報告。「もうだめです、早く逃げませんと」。仕方なく、本を手にして荷車に飛び乗った。それでも本を読むのを止めない。別宅につくや、何事もなかったような顔つきで、平然として先の本を読みつづけた。暫くすると、弟子が馳せ参じ報告した。「ご邸宅残念ながら、焼け尽してしまわれました」。羅山「書庫はどうだ」弟子「焼失しました」。

羅山がつくりして天を仰いで嘆じて曰く「ああ、多年骨折って集めた蔵書を、火の神にやられてしまった。惜しいことだ。怨むべきことだ」と。この日の夕方から鬱々として沈みっぱなしで、翌月の五日にぼっくり亡くなった、という。羅山、「本と共に去りぬ」。（「先哲叢談」より）

第三講：林鳳岡（はやしほうこう）

林羅山の孫。その人となりは豪俊雄邁、学を祖父に承け、通博多識で、一代の碩儒者であった。豪気で権勢に媚びることを殊に嫌った。

鳳岡、かつて貴人宅を訪れた。主人はもとより尊崇する学者の訪問であるから、上座に据えて歓談していた。時は寒い季節。鳳岡は煙草を吸いながら横柄な態度で言った。「ああ年寄りには頭が冷えてしょうがない。頭巾をかぶらせてもらいますぞ」と。即座に主人は鳳岡の体をさすって温めながら言った。「先生のお肌はつやつやして、鬢櫛（かくしやく）としておられますなあ」と。鳳岡「ちょっとすまんが、背中が痒いので手を伸ばして掻いてくださらぬか」。

主人背中を掻きながら、「私に何か一言守るべき訓えを賜りたい」。鳳岡「ただ、尼さん漁（あさ）りを慎みなされ」。（この頃街で、比丘尼で淫を売っている者がいて、好色者を尼さん漁りと世間で言っていた。それを瞥えに、主人の好色をたしなめた、という話）

又、こんな話もある。荻生徂徠も鳳岡の門下であった。当時徂徠は、飛ぶ鳥を落とす勢いの柳沢吉保の庇護のもと、藩学文武教場の教授を勤めていた。鳳岡が柳沢邸を通りかかった時、柳沢侯からの所望で、徂徠と対面した。鳳岡が徂徠に曰く、「汝、最近異説を唱えて、程子や朱子を反駁していると聞く。程子や朱子を反駁するのはまあ良しとして、彼らを反駁するのは、子思や孟子までをゆくゆく反駁することになる。それは決して許さん。わしもただじゃおかない」と。「徂徠頓首拝謝す」と「先哲叢談」にある。傲慢不遜の徂徠も、鳳岡には頭が上がらなかったようである。（「先哲叢談」より）

第四講：石川丈山（いしかわじょうざん）

藤原惺窩門下の漢詩人・書家。名を凹といい、六六山人とか凹凸窩等と号す。元武人で、徳川家康に仕え、大阪夏の陣で、独りひそかに軍営を抜け出し、敵の首二級を挙げたが、軍律違反の罪で罰せられた。晩年、世事を投げ打って漢・晉から唐・宋の優れた詩人三十六人を選び、狩野探幽にその肖像画を描いてもらい、自らその詩各々一首を添えて長押に掲げた。比叡山西麓にあるこの居宅を「詩仙堂」と号した。（現在京都左京区にあるのがこれ）

詩人としての名声高まるなか、来訪希望者は増える一方であったが、林羅山や僧元政等の数人以外は皆な謝絶した。後水尾天皇もしばしば招聘したが、固辞し続け、最後は和歌でその志を陳述し、天皇も諦めたという。その和歌以下のごとし。

わたらじな蟬の小川の浅くとも老いの波そう影ぞはづかし（老いを理由に断った）

丈山は朝鮮の詩人・権式をして、「日本の李白・杜甫」と言わしめる程、詩に長じていた。林羅山との友義殊に深かったが、意見は全く相容れず、往復書簡で侃侃諤諤やりあった。丈山は元武士であっただけに、軍略にも詳しく、羅山の返書に織田信長と豊臣秀吉論が述べられている。以下に略述。

秀吉の優れたところは、機に臨んで変に應ずるの勢いに乗じ、間髪を容れず敵の乱れを衝いて、大軍を集中させて勝利を掌握するやり方で、いわば正戦を用いた。一方、信長は、土地の險難にかかわらず、兵卒の多少を弁ぜず、不意に出て、敵の虚を衝いて十戦十勝するやり方で、いわば奇戦を用いた。秀吉の軍は形有るが信長の軍には兵に形が無い。そもそも形有るを以て、形無きを討ち、正戦を以て奇戦に勝てるだろうか。もしかりに信長と秀吉が一戦を交えたら、十中八九、信長が勝つだろう、と。

そんな軍略話も、晩節に至って興味を捨てたのであろう、「一に諷詠を事とし、口に兵革（軍事）を絶つ」とある。（「先哲叢談」より）

第五講：中江藤樹（なかえとうじゅ）

日本の陽明学派の祖。近江の人。藤樹幼少より老成の風あり。十一歳の時、「大学」の「天子から庶民に至るまで、専ら皆な身を修めることが根本である」という文章に感嘆し、聖人の道を極めんと決意した。十七歳の時、京都から来た僧侶に「論語」を習った。当時は武術を習う者はあっても、学問に関心のある同僚は無く、藤樹一人が出かけて聴講した。同僚からは誹謗されたので、夜になってから「四書大全」（朱子学の書物）を開いて読んだ。

藤樹は孝行者で、母が他郷に行くのを欲しないのを見て、故郷に帰ることを大洲藩に嘆願したが許されず。遂に家財道具を売り払って数十金を得、この年の俸給分を返納し、かつ二君に仕えぬ決意を誓って、脱藩した。帰郷した藤樹は、「王陽明全集」を耽読し、朱子学から陽明学に転向した。実践躬行することを重んじ、文詞がどうかは後だという教諭を四隣の人々に施した。賢愚に関わらず、藤樹を慕い、その教えは周囲を感化興起した。

かつて夜半に郊外から帰宅する途中、山賊が道を塞いだ。「金を出せ」。藤樹、賊を熟視した後銭二百を与えた。賊、刀を抜いてさらに言うには「金だけじゃない。ぬいぐるみ、刀も皆なだ」と。藤樹顔色ひとつ変えず答えた。「一寸待て。君たちにやるべきかやらざるべきか考えてみた。そしたら、輕輕しく与える理由が無いと決まった」。刀の柄に手をやって曰く、「そもそも戦うものは、必ずまず姓名を名乗ってから尋常に勝負するもの。拙者は近江の者で、中江藤樹と申す」と。

盗賊それを聞いて驚き、刀を投げ出して言うには、「いや恐れいりました。五尺の童子と雖も、先生が聖人であることを知らぬ者はございません。わしらは盗賊を以て家業とする者ですが、聖人まで狙うつもりはありません。どうか哀れんでお許し下さい」。藤樹曰く、「人間なら誰しも過ちを犯すもの。過ちては改むるに憚ることなかれ。善はそこにある」と言って、知行合一の理を説いた。盗賊、皆な感泣して、その後全員良民となった、という。（「先哲叢談」）

孝行者の藤樹が生涯でただ一つ、母親に逆らったことがある。三十歳の時、結婚した。相手の女性の容貌が醜いとて、母親が猛反対したが、この女性は容貌醜いと雖も、性質聡明にして心を用いること正しい女です、と言って貰った。案の定、門人の面倒をよくみ、夜中まで働いて、どんなに遅くなろうと藤樹の寝る前に床についたことがなかった、という。（伴高蹊著「近世畸人伝」）

第六講：熊沢蕃山（くまざわばんざん）

京都の人。名は伯継、号を息游軒。引退後蕃山了介と称す。中江藤樹に陽明学を学び、岡山藩主池田光政に仕え、財政・行政面で多大な貢献をする。後に荻生徂徠は常に言っていた。熊沢蕃山の知と伊藤仁斎の行、そして我輩の学を以てすれば、則ち東海始めて一聖人を出す、と。

かつて蕃山、良師を求め旅を続けていた。江戸に向かう途中の近江の旅籠で、一人の旅人から大変興味深い話を聞いた。　　過日、私は殿様の命令で出張したことがあった。時に三百両もの大金を懐に入れていた。殿様から預かった金だ。だから道々馬に乗る時は、財布を鞍に結び付け、用心して行った。ところが、宿に着いたのが夕暮れで、疲れていたのものでそのまま寝てしまった。夜中にふと目が覚めると、懐が軽い。しまった、財布を鞍から外すのを忘れた。これは参った。馬子は帰ってしまったし、名前や住所は聞かず仕舞いだった。後悔して、悲嘆にくれたが自分の不注意。いっそ割腹してお詫びするしかない。そう覚悟を決めた。とその時である、誰かが宿の戸をどんどん激しく叩いているのが聞こえた。出てみると、何と昼間の馬子だ。そして「昼間家に帰って、馬を洗おうとしたら、鞍に財布が縛り付けてある。これは大変だ、と掛けてつけてきただ」と言う。私はもう驚喜措く所を知らず、感謝してお礼に十六両受け取ってもらおうとした。そしたらどうだ、「あんたの物を反しにきただけだから、そんなにもらわなくていい、ただ、夜っぴてここまで来たのだから、雇い賃として五文下さればいい」と言うのだ。

そこで不審に思ったので聞いてみた。「今時、これほどの正直者に会ったのは始めてだ。一体どうしてそんなに無欲なのか、その訳を教えてくださいぬか」と。すると馬子が言うには、「わしの小川村には、中江藤樹という人があって、まごころと正しい心で身を修め、殿様には忠義を尽くし、親には孝行し、貧乏だからといって生活を乱したらいかん、と教えてください。今、あんたの財布を盗んだり、お礼をいっぱいもらったら教えに反する」。そう言って立ち去った。旅人の話は以上のものであった。

青年熊沢蕃山、はたと膝を打って、この中江藤樹という人を措いて外に師はあるまい、と直ちに小川村に赴き、門人としての許可を願いでた。だが、藤樹は「自分はまだ修業の身、弟子をとるなど出来ない」と断り続けた。三日三晩庇の下に居座って懇願する蕃山を見た母親の説得により、晴れて門人の許可がおりた、という講談張りの物語である。

第七講：野中兼山（のなかけんざん）

土佐の人。名前を止、号を兼山。土佐藩の家老。若年にして「中庸集註」を読み感激、谷時中に学問を学ぶ。朱子の学説最も妥当なりとして、毎年長崎へ朱子の書外、舶来の書物を蒐集し、翻刻して後学の便をはかった。山崎闇斎はその門下の一人である。

藩の財政確立のため治水・港湾改修・殖産興業に努めた。ある時、江戸から帰るにあたって、手紙を書いた。「土佐は物に恵まれ、江戸から持ち帰る物はなにもない。はまぐりを一艘買ったので、海路がもし無事だったら、皆に献じよう」と。城下の者たちは、日数を数えて帰りをまった。やがて、無事帰国するや、兼山は船で積んできたものを、一個も余さず海中に投じさせた。あれよ、といぶかしがる皆なを前に、兼山笑って曰く、「これは君たちだけに持ち帰った土産にあらず。貴君たちの孫にやるためのものだ」。後に果たして多くのはまぐりを生じ、土佐の名産となった。皆なは始めて兼山の遠慮深謀に感心した、という。

兼山の性格は厳格毅然としていた。政治をやるに際しても、法律を厳しくして、仮借することの無いものだった。友人の小倉三省が、昔から功ある重臣で、終りをまっとうして福祿が子孫末代まで及ぶ者は、皆な徳量が寛大で仁を垂れ、恵み多かったからだ、お主のやり方は厳罰がきつ過ぎる。一時は効き目があるが、いずれ人々の反感を買い、きっと失脚免れぬぞ、熟慮せよ、と言ったが聞き入れなかった。三省死後は益々厳格・豪奢になったため、予言通り、失脚し病を得て（あるいは死罪を蒙り）死んだ。

新井白石は次のように評した。近年、土佐に野中某という者がいた。経世の学を開き、宋儒（朱子学）を崇（とうと）び、国を治め、君主の補佐をした。しかるに性質が厳格で、非行を厳しく攻めること鷹の如く、その終りを全うすることあたわず。惜しむべきのみ、と。

第八講：山崎闇斎（やまざきあんさい）

闇斎名は嘉、別号を垂加。京都の人。医師の子で母が孕める時、比叡山に祈った。一夜夢に、老翁が梅花一枝携えて左袖に入れる夢を見た。生まれたのが闇斎である。若い頃から暴れ馬の如く制しがたく、妙心寺に預かってもらい禅の修業をさせた。それでも一向になおらなかった。闇斎ある時、仲間と議論して言い負かされた。悔しくてその夜、ひそかに仲間の寢床に忍んで、彼の紙帳を火で燃やしてしまった。

ある時は、仏典を読んで、大声で笑ってみたりその倣岸不羈な態度のため、皆なから闇斎を追い出す決議が決まった。この時土佐の公子がたまたま妙心寺におり、慧眼を以て才を見抜き、闇斎を国の小倉三省・野中兼山等に引き合わせ教育した。

闇斎が、始めて江戸に来た時は、貧乏で蓄えも殆どなかった。できるだけ本屋の隣に間借りして住み、本を借りて読んだ。この書店の主人は井上侯邸に出入りしていた。ある時、井上侯が本屋の主人に聞いた。私も学問を学びたいのだが、お前さんの知るところで、人の師たる人物はおるか、と。主人が曰く、「最近一儒学生で、山崎某という者がおります。その風貌・風韻から察するに、尋常な者とは思えません。閣下に召抱えられればこの儒学生も幸福を得るでしょう。侯、喜んで賛意を示した。

主人が帰って早速闇斎に告げると、闇斎毅然として曰く「侯、道を問わんと欲すれば、先ず侯からこられたい」と。主人憮然として思った。もしこんな生意気な奴を推薦したら、必ず上司を凌いで、問題を起こし、禍いが自分にも及ぶに違いない。推薦しないでおこう、と決めた。

ところが他日、又井上侯から例の山崎生はどうした、との問合せ。仕方なく闇斎が言ったことを話して、他の先生を選ばれた方がいいと言うと、侯は、「現今、我は師なりと称している者の多くは、道を行うに意を注ぐより、その技が売れ易いことを望んでる者が多い。しかし、私はこういうことを聞いた覚えがある。「礼は自分から師の所へ来たって学ぶというのを聞けども、師が生徒の方へ往きて教えるというのを聞かず」と。山崎生は真の儒者である、といって、即日駕籠を命じてその居を訪ねた。（「先哲叢談」より）

第九講：木下順庵（きのしたじゅんあん）

別号を錦里。京都の人。松永尺五に朱子学を学ぶ。又、韓愈の愛読者で毎日読んだ。晩年江戸に移ってからは、王陽明を愛し、常に全集を傍らに置き、暇さえあれば頻繁に読んでいたという。順庵門下を木門といい、新井白石、室鳩巢、雨森芳洲、三宅観瀾等の有能な弟子を輩出した。加賀藩に仕え、将軍綱吉の侍講を勤めた。

若い頃、某侯に従って、江戸に行ったが、志を得ず京都に帰った。それから、戸を閉じて書を読んだ。暫くして、その名は海内に聞こえるようになった。加賀侯が高額の俸禄を以て招聘した。順庵、辞退して言うには、恩師である松永先生の子息が家業を継がれまだ使途に就いておられません。家計が困しいと聞いております。願わくば、彼を用いて頂き、その宿望を遂げさせてやりたい、と。

加賀侯これを聞かれ、今の世、たとえ交際はあたかも手足の如く親しくし、交誼は金石の如く固しと雖も、利害が関わることには兩岸で相争い向かい合うのが通例である。しかるに順庵の如きは古人の節操固い者に比すべき人物である。あっぱれじゃ、というわけで松永氏の子息と共に召抱えられた。そして、数年も経たぬうちに数多の儒者の中から異例の抜擢を受けて、将軍家の儒者の一員となった。時に六十二歳。晩成の大儒である。

晩年、自画像に題して曰く、「富貴貧賤、用捨行蔵はぐ遇に因（よ）り、運に因る。いづくんぞ有とせん、いづくんぞ亡とせん」と。富貴や貧賤は天命次第。用いられれば行き、不用ならば去る。いづれにせよ自己が関与できぬことには運まかせにして、保とうとも捨てようとも思わず、それに従った。恬淡たる爽やかな儒者像が浮かんでくる。

第十講：伊藤仁斎（いとうじんさい）

伊藤維楨（いてい）。字は原佐（げんさ）、仁斎又は古義堂と号す。古学派。京都の人。仁斎は幼少の頃から群兒と異なって才能が優れていた。始めて句読を習った時から、既に儒学を以て世に耀かんと志した。長ずるにつれ益々勉学に励んだが、生家が商いを営んでいた関係上、身内の者は皆な学問に反対した。お前のやってる学問とは、もともと異国のもので、たとえそれを修めたからといって何の利益も生まない、と。十九歳の時父親と琵琶湖や三井寺に行った。その折に作った儒学や聖人を慕う詩を見て、仁斎の深い志に周囲は折れた。

初めは朱子等の宋学を奉じ、三十七八頃から独自の見解を述べ出した。やがて仁斎への反駁が始まった。大高坂清介という儒者が「適從録」を著し、仁斎を攻撃した。弟子がその書を示して「先生、これに反論して下さい」と言ったが、仁斎笑って答えず。弟子さらに言うには、「このままですと、相手は何を言い出すか分かりません。先生がおやりにならないのなら、私が代わって挫いてみせますが」と。仁斎曰く、「君子は争う所無しじゃ。もし彼が是で我が非なら、彼は自分にとって益者となるし、彼が非で私が是なら、いずれ彼が学問の進んだ段階で、自らの非を悟るだろう。よく戒めなさい。学問の要諦は、ただ虚心公平にして己を修めるのを主とする。どうして彼を謗り、自分を立て、いたずらに口数多きを良しとしようぞ」と。

仁斎、家、赤貧にして、正月の餅さえ買うことが出来ない有り様だった。しかも平然と意に介さない。そこに妻が来て言うには、「私は家事・育児にまだまだかつて耐えられないことはありませんでした。しかし、忍ぶことのできないのは、息子の原蔵が、未だ貧乏の何たるかを知らず、他人の家に餅があるのを羨み、しきりに欲しがることです。口で叱って言い含めるのですが、断腸の思いです」と言って号泣した。仁斎、机に向かって書物を読んだまま、直ちに着ている外套を脱いで、妻に渡した。

この原蔵が後の伊藤東涯である。荻生徂徠門下の太宰春台は、徂徠も自分も仁斎に及ばぬものが三つあると言った。一は仁斎が自説を構築したこと。二は生涯誰にも仕えずに通したこと。三に東涯という凄い息子を遺したことである、と。東涯は大学者となった。

第十一講：荻生徂徠（おぎゅうそらい）

本姓を物部氏といい、名は雙松（なべまつ）。字が茂卿なので、物茂卿（ぶつもきょう）と呼ばれる。徂徠、謫園（けんえん）と号す。江戸の人。柳沢侯に仕える。初め朱子学を学び、後に「古文辞学」を唱道した。弟子に太宰春台、服部南郭等を輩出した。

徂徠十四歳の頃、父親は医師であったが、ある事件に連座して上総（千葉県中央部）に流され、共に従って行った。徂徠が二十五歳になった時に父が赦免されるまで、そこで十三年間、田舎者たちと暮らした。師友とする者もおらず、独り手垢のついた、お祖父さんが句読した「大学諺解」一冊を繰り返し読んだ。それが後に他人の講義を聞かずして群書に通じる初めとなった。

江戸に戻った徂徠は、芝に居を構え、講義を以て生計を立てたが、赤貧洗うが如き状態だった。増上寺前に豆腐屋があって、徂徠が貧なれど志が高いのを知って、毎日豆腐の糟をくれた。後日禄を食むようになってから、徂徠はその時の恩返しに、米三斗を贈ってこれに報いた。柳沢侯に召されてからは、俸禄も徐々に益し、五百石取りにまでなった。

徂徠は、儒学のみならず兵学にも通じていた。「孫子解」は優れた著書である。有る晩、弟子たちが「韓非子」を論じ合い、議論百出した。徂徠は黙って聞いていた。太宰春台が、不愉快そうな表情で言った。「先生はどうして我々の議論を折衷してくださらないのか」。徂徠静かに答えるには、「韓非子については、かつて考えをまとめたことがある。明日まで待ちたまえ」と。そしてその夜、筆をとって、全編にわたる徂徠の説をまとめあげた。

大岡越前守忠相が、荻生徂徠があまりに博識洽聞であるとの評判を知って、からかってやろうと企てた。ある日徂徠を呼んで質問した。「世に鼠の嫁入りという話があるが、どういうことか」と。徂徠、某年某人の著す某書に載っている話で、その載っている鼠の種類や姓名、筋書き等々、縷々注釈を添えて答えた。忠相始めてその博覧強記に舌を巻いたという。「先哲叢談」より）

第十二講：貝原益軒（かいばらえきけん）

貝原篤信、字は子誠。号を益軒又は損軒。益軒幼少より警敏にして優れた素質をもっていた。九歳で、兄存斎に就いて書を読み、多く暗誦した。中年に至って京都に行き講学した。この時、京中の名士が講義を聴きにきたという。益軒は特にこれといった師には就かず、初めは陸象山や王陽明を学び、後に朱子学を信奉した。彼は好んで著書を著した。その数百余种で、多くは国字を以て、懇切丁寧な農夫、工女、幼児、召使までが理解できるように書いた。老いて益々元気で、八十を過ぎて日夕書を離さず、「楽訓」や「養生訓」等を著した。

益軒は、時に漢詩を作ることはあったが、和歌の方を好みまた推奨した。曰く、和歌は我が国で発達したもので、詞意が通曉し易しい。だから古人の歌詠は極めて優れている。又、女性でもこれを能くする者がいる。しかるに唐詩は言語の韻が我が国と異なり、中国に模倣し難い。だから、名家といわれる連中の作品も拙劣で和歌に及ばない。又、下手な詩を作ってあざけりを受けることにもなる。白樂天も言っている。詩を作る者は、心を勞し、虚しく声気を役す、連朝接夕自ら其の苦しみをしらない。魔に非ずして何ぞや、と。これは、詩は魔物だと言っているのだ。等々。

かつて江戸から大阪に向かう旅路を船で帰った。同船する者数名。お互いに姓名を知らなかった。雑然と向かい合わせ、蝶々と話し合っていた。中に一少年がいた。敢然として、「大学」がどうの「孟子」がこうのと談じていた。まるで傍らに人なきが如く。益軒は聾啞のように黙って、愚人のようだった。船が入港し、岸に着くと、お互いその姓名・郷里を名乗りあった。たちまちその少年は益軒たるを知り、恥ずかしさに堪えられず、こそこそと立ち去った。

益軒著すところの「慎思録」に、当時の連中の学を評して曰く、「最近の学者は、書を読み文章を学ぶことばかり多く、徳を慎み行を努めるの工夫が常にすくない。又、自説を立てようと欲して、他人の言葉尻を捉えては責め、ややもすれば常に輕薄で淺薄になってしまう。たとえその説が是なるところあったとしても、その心が非である。賤しく淫らで君子の氣象に欠ける、と。

第十三講：井上蘭台（いのうえらんだい）

井上蘭台、字は叔、江戸の人。備前侯に仕える。幼少より鋭敏にして学問を好む。十二歳の元日に詩を賦して曰く、「天辺雲物改まり、海上日華新たなり、先ず酌む屠蘇の酒、庭に趨（はし）って老親に献ず」と。父親驚き修学させることにした。林鳳岡の門人となる。鳳岡が官の書庫を校閲することになり、蘭台がこの任にあたった。人はこの仕事の史官の呼び名をとって「蘭台、蘭台」と呼んだのでそれを号とした。

蘭台、若い頃より淫欲を絶った。女性には老少となく一語を交えることを欲しなかった。人が場所を聞いたり、宴会や飲食をしている時でも、女性がでくるとさっさと辞去した。

蘭台戸を閉じて書を読む。客至る有れば、則ち自ら答うるに不在を以てす。客以て戯れと為す。蘭台声を励まして曰く、主人自ら答うることに此の如し。何の偽りか之有らんと。書を読んで輟（や）まず。

蘭台は程朱の学（朱子学派）を好まなかった。かつて室鳩巢の文章を読んで、あまりに朱子の説に固執しすぎるのを誹謗した。そして、国家が必ずしも宋学によらないことを証拠を挙げて論駁した。その中の一つ。林羅山が、家康公に「論語」を講義した。「郷党第十の十三」に次の文章がある。

<厩（馬屋）焚（焼）けたり、子、朝（廷）より退きて曰く、人を傷（そこな）えりや。馬を問わず。（不問馬）>

これを、「不」の字を「否」に変え、「人を傷（そこな）えりや否や。馬を問う」と読む説があるのを疑問に思い、家康公が「何で不を否と読むのか」と羅山に質問した。羅山が言うには、「人の無事を問うなら、又馬の安否を問うべきでしょう」と。家康「それは朱子の解釈とちがうぞ」。羅山「私が思いますには、もし国家の厩舎なら即ち馬の安否が先です。が、この場合は孔子の私厩です。だから人を重んじ家畜を賤しむのは当然の義です。もとより朱注の意ではありません」と。これからみても、当時は諸説を色々俎上にのせて、解釈の幅があった。と蘭台は朱子一辺倒の鳩巢を論駁したのである。荻生徂徠に似た偏屈な一面をもっていたようである。（「近哲叢談」より）